

## 講演 (1) 現代社会の危機について

タルコット・パーソンズ

司会 ではさっそくタルコット・パーソンズ先生の講演に入りますけれども、講演は約45分間位の時間をいただきまして、通訳もできるだけ詳細に願いますということで、やはり45分位を要しますので、その後に残った時間を質疑応答に当てさせていただきますと思います。

久山院長、小寺学長、倉田社会学部長、そして司会の萬成先生ありがとうございます。今回、ここに出席できましたことに対しまして三つの理由でうれしく思っています。一つは日本に割合長くいられる様になりまして、自分自身、日本の生活を体験できること。と申しまして、現在の年齢では、日本語を勉強するという事は、ちょっと無理だと思えます。二つ目には、関西学院に参りまして、客員教授として、講義をさせていただく機会を得られました大変感謝しています。またみなさんが大変、私達夫婦によくして下さいまして感謝しております。三つ目には、今日セミナーハウスの開館記念の催にあたりまして、私が、その一員として参加させていただいていることに対して大変うれしく思っています。

### I

本日、「現代社会の危機」という課題を与えられました。これは非常に大きな示唆的なトピックであり、このトピックは私の色々な考えを刺激いたしますが、私自身は危機という概念に対して、懐疑的に思っております。これは、ことにアメリカの社会で、又、他の国でもそうであると思えますが、ふつうでない事件は、何でも危機をかもし出す様に思われる傾向があるからであります。もし、それが事実でありましたら、私が社会学者として活動してきました50年間は、人類にとって大変た

くさんの危機があったということになります。

こういう考え方は、アメリカ人はいわゆるゲーム・セオリーで申します「最悪のケースの分析」に影響されているのではないかと思います。つまり将来に起り得る事件を考えるにあたって、最悪の場合には、どうなるかということをもまず考え、最悪の事件がおこりうるという事から、恐らくおこるだろうという考えに移ります。

さて、今世紀におきまして、吾々は危機に面してきました。今、私の考えております危機は1914年の第一次大戦に始まりました。私はその大戦が始まりました時には、まだ自分自身の考えというものを実感していなかった頃であります。その後、次第にその事を考える様になりました。第一次世界大戦は、実に大きな危機であったと申してよく、その危機の事態は、1914年から第二次世界大戦の終りましたずっと後まで続きました。そして第一次大戦と第二次大戦の間は、休戦状態でした。その間にドイツの力がたいとうし、日本は第一次大戦から第二次大戦にその味方を変え、第二次大戦後は、冷戦に入りました。その後1950年代後半、60年代に入ってからやっと実際平和的な時代がきたと思えます。

次にもう一つのタイプの危機について述べたいと思えます。二つ目の危機は、普通、正式な激変をともしなわれない変化でありまして、例えば、「産業革命」があげられると思えます。革命とは呼ばれていますものの、これは静かな変動であります。18世紀の末期の英国に始まり、それが19世紀を通して進行し、20世紀に入ってもほとんどの地域でこの状態は続いています。

### II

これと同時に、もう一つ静かな変動をとり上げたいと思えます。この静かな変動はある意味にお

いては産業革命よりももっと重大な変化をもたらすものだと思います。二つ目の静かな変動を私は「教育革命」と呼びたいと思います。今日はこの問題を中心に話を進めていきたいと思います。このトピックに関しましてはディスカッションが今まで大変少なかったと思います。最近の世界的な学生紛争以来、その傾向が少なくなってきたかもしれません。一つの例として労働者の教育をあげますと、カール・マルクスが論じていた頃の労働者の教育を見ますと、労働者のほとんどは文盲でありました。正式の教育というものはほとんどみんな受けていない。これは現在の日本、アメリカ、又、西欧と対照的であります。現在の労働者層は教育程度が大変高く、アメリカにおいては12年の義務教育がふつうでありまして、これは10パーセントそこらのエリートの教育というものを意味しているものではありません。このことに関しては現在まであまり議論されてきていませんでしたが、産業革命初期の資本家、私の師、シュンペーターのいう企業家という人達の教育をみますと、教育の程度はそんなに高くはありませんでした。スティブソンというエンジンの発明家も教育のあった人ではありません。英国でインベイターという言葉は、教育がないということの意味しています。

昔の資本家はこのような教育を余りうけていませんでした。しかし現在はそうではありません。萬成教授の近著に感銘を受けましたが、その著書にありますように、日本の現在の経営者は大学教育をうけているということが、ほとんどの場合、前提になっています。産業革命初期にはそうではありませんでした。明治政府は、維新直後、全国的な教育制度、義務教育制度を設立しました。もう一つの、それより後の例としてソビエト(ロシア)についてふれてみましょう。1917年以前は現在ソビエトの中に入っている地域の人民のたしか85パーセント位だったと思いますが、それくらいが文盲でありました。しかし、革命後ボルシビック政府は教育制度の整備を大いにすすめ、ソビエト人民は現在は全く文盲ではありません。

この教育制度の一番大事な影響あるいは非常に明らかな結果といたしまして、大学教育つまり高等学校教育を終えました後の教育のことが取り上

げられます。19世紀から20世紀への世紀の変わり目の一代前頃には、ヨーロッパでいわれている意味の大学というものは北アメリカ大陸、つまりアメリカ、カナダ、メキシコなどにはなかったと言えましょう。このような大学はアメリカでは南北戦争以後に起ったことです。ヨーロッパでも大学というものは非常に少数のエリートだけのものでありました。1900年すなわち20世紀が始まる以前にはおそらく大学教育をうけた者は世界中どこでも、その年令層の5パーセント以下であったでしょう。北アメリカでは、今世紀に入ってずっと後までこの状態が続きました。

こういった変化と発展は、ヨーロッパ、北アメリカ、又、少しおくれまして日本に関する平均的な歴史の教科書をみましても、ほとんど書いていません。中等学校の発展に関しては少しは書いてありますが大学のことに関しては殆んど言及していません。しかしこの変化は静かに起こりつつありました。この変化の基礎は、この世紀の前にすでに存在していました。当時、私がいまハーバード大学は、小さなカレッジから現代的な意味の総合大学に変わりました。法律的には現在でもまだ「カレッジ」とよばれていますが、しかしこれはあまり複雑ですから今日はその問題には入っていきません。同じことがコロンビア大学についてもいえます。コロンビアは、昔はキングス・カレッジというふうには呼ばれていました。イエール大学、プリンストン大学もそうであります。シカゴ大学は、1892年に設立されましたし、又西海岸におけるスタンフォード大学、ミシガン大学、カリフォルニア大学、ウイソコンシン大学も大体この頃に名実共に総合大学として設立されました。このような基礎が非常に小さなスケールで設立された後で、非常に大きな発展をとげました。第一次大戦と第二次大戦の間にその活動が見られつつありましたが、しかし第二次大戦後に大きな力となって爆発的にあらわれました。一つ数字をあげますと、アメリカでは1970年以降、高校卒業生の51パーセントが大学教育あるいは、高校教育以後の何らかの形の教育をうける様になりました。これは世界の歴史においてこれまで全く見られなかったことであります。ただこの国においてみられなかったということではなくて、世界史の上に

において非常に重要な事件であります。

これに関連しましてエリートの大学教育がだんだん向上してきました。これは大学教育だけでなく、大学が重視されてきたこともその現われであります。日本においては、大学の学部の教育と大学院の教育との間にはっきりした区別がないということをお私は理解しています。しかし医学、法学、又経営学や多岐に亘る工学とかいった部門では大学における専門的な教育がまずだんだんと授けられる様になり、学部での特別な教育がそういった専門教育以前に必要なとされてきました。

### III

こういう大変化が起こりました歴史的な原因を考えてみます場合、二つの原因が考えられると思います。一つは教育の革命は産業革命ではなくて、民主革命の落し子であったと思います。ことに初等、中等教育の全国民への普及を考えました場合、それがいえると思います。これはフランス革命及び当時の民主主義的思想にもさかのぼります。

このことがアメリカにおいてもあつていているということはトックビルの書きました本なんかによつてもわかると思います。教育を生み出した民主化という親と同時に、もう一人の親ということをお考えてみますと、これはヨーロッパにおけるハイ・カルチャーということがいえると思います。アメリカの大学制度にとりましてその一番重要な一つのモデルとして19世紀のドイツの大学があげられると思います。これはもちろんナチズムということ、ヒトラーとは全々関係のあることではありません。ヒトラー及びナチズムはドイツの大学をもう少しで破壊してしまうところでした。19世紀においてはドイツの大学は非常にすぐれたものでありまして、フランス、英国の大学よりも大変すぐれておりました。もっともその後、今世紀以前にオックスフォード、ケンブリッジ大学が改革され、ロンドン大学や他の英国の大学もそれにひき続き、また、フランスでも同じ様なことがおこりました。そしてこういった大学では科学の各部門、また芸術の部門が重要視されることになりました。

ここで私の意見を明確に述べたいと思います。

つまりこれは経済的な利害関係ということが、こういうことをもたらした原因となっているのではありません。ただいえますことは、経済的な資本を購入しようとするのではなくて、プレスティジを買おうというふうな利害関係が、ここからまってくるということはいえるかもしれません。例えば、シカゴ大学は現在では世界的に偉大な大学であります。これはロックフェラー1世の巨額の寄付によつてたてられたものでありますが、ロックフェラはこれを寄付しました時にスタンダード石油会社の利益ということをお考えていたとは思いません、恐らく全く違つたことをお考えていた、ということで今はとどめておきましょう。

この事実は強調する価値があると思います。この事実は二つの面がありまして、10年前の学生紛争をご存知のみなさんにはよくわかることと思ひますが、学生は、ハイ・カルチャーというものに対して、アンビバレントな考え方をもつていました。実際、学生はハイ・カルチャーをエリート主義として見なしていたのでした。その様なハイ・カルチャーは勉強すべきではない、勉強すべきものは全く民主的な科目だけであるというふうにお主張しました。しかし、高等数学において民主的なものがありましようか、そういうことはいえないと思います。この過程の中にはもう一つの面がありまして、それは研究の発展ということでありまして、つまり知識の向上を目的とする組織だつた探究ということでありまして、これが各部門において行なわれておひます。現在の大学においてはいろいろな部門において、非常に多くの科目について教えられておひます。しかしそれはいろいろな科目を教えるためには、そのバックとなるリサーチがなければできません。

大学の要覧をみますと、この科目の広範囲なことを知ることが出来ます。この広さということはお研究の深さということにも結びついてきます。これは自然科学の方においてもっとも顕著にみられます。

一般の人達にとっては、自然科学が非常に発展したため自分達には知識の内容がわからないということ、非常に深いトレーニングをうけなければわからないということが実質的に感じとられます。この範囲と深さの増大ということはお、過去の

世紀からずっと続いてきたということであり、今世紀に至ってきわめて顕著にみられるようになりました。あなた方の大学においても私たちアメリカの大学と同様に盛んな議論が多くあると思います。つまり研究と授業とどちらの方が大事であるか。紛争時代の革命像は、よく大学の先生は教えることが第一であって研究というものは学生に対する義務へのマイナスになる、或は大学の外に設けるべきだと主張してきました。

現在においては、この問題は前ほど重要視されなくなりましたが、その問題が取り上げられるということは理解できます。長い目でみました場合には、教育革命ということは研究と教える授業ということを両方ふまえていなければ、既に現在までに見られたこの革命の効果も見られなかっただろうと言いたいと思います。研究と授業ということが区別、分離されている顕著な一つの例として皆さんもよくご存じのように、ロシアがあげられると思います。アカデミー・オブ・サイエンスは大学から分離されているのでありまして、これは政治的な動機によって補強されていると私は思います。といいますのは分離されたアカデミー・オブ・サイエンスでの研究は大学内での研究よりも効果的に政治的圧力から守られるからです。例えばアカデミーでは経済問題の研究におきまして、マルキシズムにあっているかどうかというふうなことを一、二云々する必要はありません。然し大学ならばその必要があります。とに角、歴史的進化的パースペクティブから見まして、教育と研究とが共々発展してきたということが、その重要な特徴だと思えます。

目にみえる結果としまして二つありますが、一つはさっき申しました教育程度の高い労働者ということですが、もう一つは現代におけるテクノロジーの発展ということであり、労働者の教育については後に申しますとして、テクノロジーの役割に関しては色々議論はありますが、応用科学としてのテクノロジーは殆んど20世紀にできたものであるといつてまちがいはないでしょう。その始まりは電気の応用であります。これは19世紀の末期に始まりまして、ダイナモの発明は科学の応用の結果といつてよろしいと思えます。そして他の電気の応用がなければ現代の社

会は大変違った社会になっていたでしょう。テクノロジーを科学の分野からとり出して別の分野にしましたのは、これは20世紀に入ってからであるといつて間違いないと思います。

核分離のテクノロジーも今までは戦争のために使われてきましたが、数十年先には、そうではなくなると私は思います。その平和利用がもっと顕著になってくると思います。他のいろんな分野にも同じ様なことがいえると思います。医学はそのよい例でしょう。ハーバード大学学長、故コナン教授は非常に懐疑的な先生でありまして、彼の申しましたことには、19世紀の終りから20世紀の始めごろまでは、医学は患者に対して益よりも害を与える方が多かったであろうというふうにいいました。これは私にも理解できると思います。私は高齢者として、伝染病に対する血清や抗生物質が全然なかった時代を憶えています。その頃はインシュリンの様なものが知られておらず、その為、糖尿病の治療は非常に限られていたわけでありまして。このようリストは大変長くなります。このように医学のテクノロジーは、今世紀に入って真実の革命をとげました。

#### IV

今まで私が申しあげましたのは、社会学者にはよく知られています、マートンが述べた顕示的機能 (manifest function)、おもてに現われた結果ということでありまして、これは目に見えやすい、理解のしやすい現象をさしています。これから私はマートンが申しました隠示的機能 (latent function) についてお話したいと思いますが、これは社会学者の間では日常の用語になっていますし人類学者のあいだでもそうでありましょう。この隠示的な結果 (latent consequence) すなわち皮相下のかくされた結果ということに非常に重要な現象が見られると思います。

これらの隠示的結果 (latent consequence) すなわち皮相下のかくされた結果に関しては、二つの種類があります。その一つは、もう一つのものよりもなおさら、かくされて皮相下にあると言つてよろしいと思えます。これらの結果は現代の思想によってかくされてきたと言えらると思えます。こ

これらの考え方を統一したのはフランス人の学者のルイ・デュモンで、人類学者と自称している社会学者であります。彼の最近の本は、英語の本の題は、その著者や翻訳者がつけたのか、発行出版者がつけたのかどうか知りませんが、本当の原題よりも変わっていきまして、Mandeville to Marx—genesis and triumph of economic ideology というふうになっています。デュモンのこの本のもとの題は Homo Equalis であります。デュモンはその前に Homo Hierarchicus というインドの社会に関する本を書き、それに対応してこの本を書いたのでありまして、そのもとの題を英語の訳にもとどめておくべきであったと思います。これは非常にりっぱな本でありまして、彼は18世紀まで逆のぼり、アダム・スミスに関する長い章があり、経済学の源流にまで逆のぼって書いてあります。また、体制的経済学、いわゆる新古典派経済学、マーシャル、ケインズ、カール・マルクスの社会学、経済学にも言及しております。この二つの分野は重要な違いがあります。ついでに申しませんが、この二つの本の題 Homo Equalis と Homo Hierarchicus はラテン語であります。どちらもフランス語で書かれたものであります。現代においては、ラテン語で書く学者はフランス人でもヨーロッパ人でもおそらく、ほとんどないことでしょう。カトリックの神父以外にはほとんどないと思います。

さっき申し上げましたこの二つの分野におきましては、次に述べる問題がありまして、それぞれの問題によって問題点の明瞭性を欠くようなことになってきたと思われまます。社会主義派の分野では、社会階級に非常に重きをおいております。そこで、ことにマルクスは、社会階級を二つにわけ、ブルジョワと労働者というふうなわけ方をしています。アメリカの社会学におきまして、たとえば、アメリカ人類学から社会学に転向しましたロイド・ウォーナーは、上の上の階級 (upper upper class) から下の下の階級 (lower lower class) まで、六つの段階にわけていますが、これは一つの連続性をもつものとして提案されています。私はこのマルクシズムの二分法による考え方も、またロイド・ウォーナーの連続性を提案した考え方も、どちらも好みません。

もつ一つの経済的イデオロギーの分野も、ある問題を明確にし得ない傾向がありました。このイデオロギーはマーケットにあまり重きをおきすぎたからであります。そこで、マーケット以外の現象というものに注意を与えなかったからです。ここで、二つの現象に注意をはらいたいと思います。前に申し上げましたように、萬成教授の研究では、教育が社会の構成上の資格 (qualification) として非常に重大であると言われてきましたが、米国でも同じようなことが言えると思います。ここで日本でもよく知られています私の大学のリースマン教授に言及したいと思います。彼の本に、確か、革命 (revolution) ということばが使われていたと思いますが、彼の言いますのに、アメリカの階級において、一番大事な区分は大学教育があるかないかということになります。これは非常に反マルキスト的な考えであります。と申しますのは、マルキストの考えでは、生産過程、生産手段を所有するか、しないかということによって、社会が分けられるからであります。そこでソビエトでもこの点が非常に混同されています。そのために非常にプレスティジのありますソビエトの Academy of Science のメンバーでも、この分け方では労働階級 (working class) というふうに、言われているのであります。つまり、労働者階級の中には、インテリゲンチヤ (intelligentsia)、つまり、手を汚さない労働者もあるというようなことになってくるのでありまして、昔のスコラ派の哲学者の間でよく言われましたように、これはピンの頭の上で天使が何人踊れるかを議論をしているようであります。

## V

今までに申し上げたことを要約しますと、ここで大事なことは、教育のレベルということだけでなく、その質ということでもあります。つまり、教育の質が教育の status の重要な要素の一つになってきました。これは教育の高い低いということではなくて、教育の違いということになります。このことから第二のポイントにはいっていきまますと、ここで申し上げたい大事なポイントは、20世紀の前まではそうではありませんでしたが、

20世紀にはいつから専門職者 (profession) つまり、専門教育を受けた者が重要な地位を持つようになったということであり、これらの人達は特別の教育を受け、その特別の条件を満たさなければなりません。たとえば、医者になるためには、その細かい条件は社会によって違いますでしょうけれども、ある一定の基準 (standard) があり、認められた大学で教育を受けなければならない。それは認可証というものがある場合もあり、ない場合もあります。医学の場合はそれはもちろんありますが、大学で教えるというためには、認可証は必要ではありません。しかしその資格というものは必要であります。

これらのいろんな非常に重要な変化が起きました、その中で一番大事なものの一つはこの専門教育を受けた人達の教育がどこでコントロールされているかということであり、大学はその大学の卒業生によってコントロールされているものではありません。それで大学は力のセンターではなく、大学は影響力 (influence) のセンターであります。つまり民間事業、政府、この二つに並んで第3のセンターとなっているものであります。もう一つこれに関連したグループで、社会、職業組織の中で大事なものは、芸術家です。芸術家をどういうふうに分類するかということは、非常にむづかしく、色々議論されてきましたし、芸術家はいろんな方法で生活をしています。その芸術家を含む大きなカテゴリーとして英語では、演技芸術 (performing arts) という範疇があります。この中には、音楽家も含めていますが、その他にもたくさんのいろんなグループを含めています。日本でもシンフォニーが、オーケストラが、たくさんありまして、何千という人達がそれに従事しています。そのように、音楽に従事するためには、職業に従事しなければなりません。つまり、給料をもらわねばなりません。これらの人達は学者でもなければ、今さっき申し上げましたような専門職者でもありませんが、これはそういう意味で第三のカテゴリーに属する分野でありまして、こういった考慮がありまして私は社会階層を二つに分けたりあるいは、一つの直線の連続性のあるシステムとすることに懐疑的な立場をとるものであります。

これらの色々な結果の最後のものとして、ここでもう一つ申し上げたいと思います。ここにいらっしゃるかで、社会科学の専門家でないかたでも、アスクリプション (ascription) という概念はご存知だと思います。つまり、持って生まれた自分の特質であります。次にこれに対応する概念としてアチーブメントがあります。アチーブメント的なバックグラウンド、これはアメリカで非常に大事であります。あるいは、貴族的なバックグラウンド、これは日本の歴史において大事なものであります。さて、教育というものはこういったアスクリプションというものを、だんだん軽視し、個人というものを重要視していく傾向があります。そしてその基準は、その個人の達成する業績 (achievement) であります。この過程において二つの要素のバランスということが重要になります。その一つは教育過程を経ていく人達をみんな平等にとり扱うこと、それに反してその教育過程において、ほかの者達よりも、遂行 (performance) がすぐれている人達に報酬 (reward) を与えるということ、この二つは相反してしまっていて、そこに緊張 (tension) がどの教育制度にも生まれます。

しかしこれはさっき申しました ascription ということと比較した場合、人種、性、居住地というようなものと比較した場合に、教育の重要性が achievement を強調するという点においては、さっき申し上げた通りでありまして、これは今まであまり重要視されていなかったことだと思います。つまり、教育の中には民主的な一面があると同時に、みなを平等にとり扱うという一面があると同時に、エリート的な一面がある。つまり勉強のよくできる者に報酬を与えるという一面もあります。教育の重要性を強調することと、社会構造の中で教育制度がより重要な役割を果たすということは、社会学者がいままで研究の中心においていた伝統的社会構造の重要性を軽視する傾向に走ります。

## VI

しかし教育過程等の選択を通じての直接の結果以外の問題もあります。そこでエドワード・シルズの言う人間の条件の最も原始的なものへかえっ

てそれを強調したい。つまりそれは「年齢」と「性」ということでありまして、これは誰ものがられないものであります。性に関しましては、手術により変えることが出来、その為、多少の例外はありますが、年齢の場合はそうではありません。最近、我々は、年齢層による社会運動を見かけるようになってきました。学生運動は世界中に見られてきました。また高年齢の人達の問題ということも、最近、重要になってきています。最近アメリカ議会は、65才以前に企業がその従来員を定年退職させることを禁止する法律を作りました。これはあなた方の社会の基準に比べれば大変おそいことは存じています。こういう法律ができたということは、非常に興味深いことであります。性に関しましても、最近、世界中で非常によく知られてきた問題となっています。女性解放運動はアメリカで、非常に重要になってきましたし、日本でも、それが現在よりも重要になってくるであります。この国への訪問客としてこのような予言はなだけさけたいと思います。

## VII

最後の点をここで申しますと、この教育革命は、非常に静かに起こってきておりますが、産業革命と同様に、非常に深い変化を社会構造に起こしつつあります。また産業革命と同様に教育革命は、社会を変動の中に落とし入れていまして、私の考えでは今よりももっとひどくなると思います。これは、学生紛争に関するもの、婦人運動に関するもの、また高齢者の問題にかかわってくるものだと思います。しかしこういうことに関しましては、我々、経済的イデオロギーを中心に考えてきた者達には予想できなかったものであります。みなさんの時代では、こういうことがもっと理解されることになってくると思います。ありがとうございました。(終)

ございました。質問の時間を用意しておりましたけれども、もう時間がなくなりました。質問の時間は明日の後半の部分に用意していますので、今からお回します紙に、所属、お名前と質問事項を書いていただきまして、これを明日の午前中の後半において、司会者がまとめてとりあつかいたいと思いますので、そのようにしていただきたいと思います。どうもみなさんご静聴ありがとうございました。

(付記)

本稿は別府教授が通訳された録音を文章化したものを、別府教授が再度、原語の録音に照合して修正された後で、倉田和四生が段落や小節つけ、表現上の小さな修正など若干の編集および校正に当たった。

司会 只今、現代社会の危機という問題に関しまして、教育革命のもたらす影響について、我々に注目を向けさせてくれる講演をいただきましてありがとう